

心臓カテーテル検査を受ける子どもと家族の検査に対する受け止め方 —小児用パンフレットを用いたオリエンテーションを実施して—

2階東病棟

○安藤 千恵 町田 和嘉子 葛西 宏美 生田 久美子
桑原 佐季 山本 真由香 石浦 光世 坂本 美和

キーワード：子ども、心臓カテーテル検査、オリエンテーション

I. はじめに

入院中の子どもは、検査や処置に対して不安や恐怖など様々な思いを抱きながら過ごしている。治療に必要な検査や処置の中には侵襲を伴うものもあり、子どもがそれらを受け入れ、取り組んでいくためにブレパレーションを行うことが大切である。

II. 研究の目的

本研究では、写真付き小児用パンフレットと人形を用いてオリエンテーションを行うことで、「心臓カテーテル検査のオリエンテーションを受けた子どもと家族が、検査に対してどのような受け止め方をしているのかについて明らかにする」ことを目的とする。

III. 研究方法

平成20年6月から平成21年3月に心臓カテーテル検査を受けた子どもと家族を対象とし、参加観察法と半構造化面接法を行った。それらのデータをコード化、比較検討し、類似した意味を持つものをカテゴリー化した。得られた結果を基に、心臓カテーテル検査を受けた子どもが、検査に対してどのような受け止め方をしているのかを研究者間で統合し評価した。

IV. 倫理的配慮

対象者には、研究への参加は自由であること、同意しない、または同意を途中で撤回する場合でも、不利益も被らないこと、得られた個人情報外部に漏洩されないことを説明し、同意を得た。また、子どもへの説明は分かりやすい言葉を用いて説明を行い、代諾者である保護者を通して、調査協力への同意を得た。

なお、本研究は所属施設の委員会による倫理審査を受けている。

V. 結 果

対象者は11名、年齢は4歳～15歳（中央値6）であった。うち検査経験あり5名、検査経験なし6名であった。付き添いの家族は全対象者とも母親であり、母親の年齢は20代後半～40代後半であった。

子どもは、オリエンテーションを受け、「どんなことをするのか」と興味を示し、「がんばってやってみよう」と前向きな姿勢を持っていた。「はなしをきいておいてよかった」と、オリエンテーションの必要性を感じたり、自分の気持ちを表出し「もっとしりたい」と希望を伝えることで、分からないことを質問し、納得しようとしていた。しかし、オリエンテーションを受けたことで「なんだかいやだな、こわいな」「がんばっているけど、やっぱりこわい」と、嫌だなという思いを抱きながらも我慢し検査に臨んでいた。また、「よくわからない」と、検査の内容を理解できていなかったり、「きょうみない」「なにかあるんだろうな」と、興味を示さず、検査のことを気にせず過ごしていた。ある子どもは「がんばったら、ごほうびがもらえる」と、検査後に自分の好きなことができることを励みに頑張っていた。

家族は、入院前には子どもに説明をせずに検査を受けようという思いをもっていた事例もあった。しか

し、検査後は全ての家族が《オリエンテーションの必要性を感じる》《子どもが頑張れるように後押しする》という受け止め方をしていた。このように、オリエンテーションを受けたことで検査の流れが理解できて良かったと感じ、子どもが頑張れるようにサポートする様子がみられた。

VI. 考 察

看護師は子どもや家族と話す時間をもつことを通して、子どもの気持ちの表出を促したり、家族とともに子どもの様子を支持し認めることが、その後の子どもの主体的な取り組みに影響すると思われる。また、オリエンテーションは子どもの発達段階に合わせて人形や写真付きパンフレットなどを使用することで、子どもの興味を引き理解を深めることにつながる。

看護師は家族にオリエンテーションの必要性を理解してもらった上で、子どもが安心して検査に臨めるよう子どもをサポートする家族の協力を促すことが必要である。

VII. おわりに

本研究では、心臓カテーテル検査を受ける子どもと家族が、検査の内容を理解する上で、パンフレットや人形を用いたオリエンテーションが効果的であることがわかった。しかし、全ての家族が子どもへのオリエンテーションを行うことを望んでいたのかはわからない。今後は、オリエンテーションの必要性やその効果を、家族にも理解してもらい、同意を得て実施していくことで、子どもが検査に主体的に参加できるような環境を調べていくことができると考える。